

その人を理解するということ

患者さんは80歳代の男性、奥さんは他界しており一人暮らしをしていました。子供は娘さんが一人で遠方在住、状態が悪化してからは実家に泊まり毎日面会に来てくれていました。入院時にはターミナル期でしたが、意識は清明で告知内容も受け入れており、延命はしないと決断されていました。音楽が好きで起きている間はカセットをかけ、床頭台には妻との写真を飾り「良かったんだ」と話をしてくださいました。状態が悪化してからも看護師がカセットをかけるようにし、なるべくその患者さんらしい環境を作るよう心掛けていました。娘さんは気丈に振る舞いながらも他に頼る人がいないと不安な気持ちを話してくれていました。私が深夜勤務で受け持っている時の早朝に呼吸状態が悪化し、医師と娘さんに連絡をしました。主で看取るのは初めてで2年目の私では力不足だったと申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、せめてもと思い、音楽をかけ、奥さんの写真を患者さんの手に握らせてアンビュを行いました。娘さんが到着し、真っ先に発した言葉は「お母さんの写真がない」でした。そこで「寂しいと思って手に握らせてもらいました」と伝え、と、「良かった」と話され、患者さんの手と写真を両手で包まれま

した。勤務が終わり先輩看護師から声をかけられると、私でなければもう少し生きる事ができたのではないかと泣き崩れ、自分の力の無さを実感したの
でした。

後日、師長より、娘さんが病棟に挨拶に訪れた際に「あの時の看護師さん
に、写真を持たせてくれていてありがとうとお礼を言って下さい。私がし
ようとしていたことをしてくれていて、お父さんはこの病院で最後で良かっ
たです」と話して下さったことを聞きました。その頃は小さな行動と思っ
ていたことが患者さん・その家族にとって大きな意味となったことを知り、
その人を理解すること、その人を想うことも大事な看護であると再認識した
出来事となりました。

当病院は難病の患者さんが多く入院しており、その人らしく生活できる環
境づくりはとても重要です。そのため、患者さん・その家族に向き合い、制
限ある生活の中でもその人らしさを大切にできる看護師を目指していきたい
と思います。